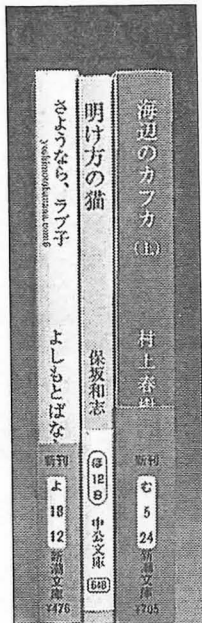


橋爪 大三郎さん(社会学者)の

2005年(平成17年)3月13日

日曜日

ポケットから



村上春樹さんの『海辺のカフカ』。文庫になったのでさっそく読んでみた。田村カフカ少年・十五歳が家出した。父の書斎の現金を盗み、あてもなく四国を目指す。父は間もなく殺される。犯人とおぼしい老人ナカタさんも、四国に向かう。並行して進むストーリーが、やがて絡まりクライマックスを迎える。父を殺し母を犯すだろうと、父に呪いをかけられたカフカ少年。ギリシャ神話のオイディプス物語を下敷きに、少年は母とも思われる佐伯さんと恋に落ちる。彼女は昔、相愛の少年を亡くしていた。

村上春樹「著」海辺のカフカ 上・下

(新潮文庫・上740円、下780円)

保坂和志「著」明け方の猫(中公文庫・680円)

よしもとばな「著」さようなら、ラプ子(新潮文庫・500円)

佐伯さんはやがて死に、その少年を海辺に描いた絵だけがこぼれる。……この小説はまるで、カフカ少年の夢なのではないか。夢のなかに夢がある。いくつもの夢が迷路のようにつながって

本当よりもっとずっと本当の世界

いる。夢と夢は、現実でないから、メタファーで結ばれるしかない。読者はこの非合理で謎に満ちた夢の迷宮をさまようことで、ありえたかもしれないもう一人のなつかしい自分に出会うのだ。

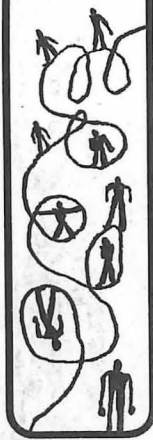
欠落を抱え、それに駆動されている。作者の自画像と取られそうな人物は、注意深く除いてある。独特な会話も魅力だ。猫のカワムラさんと、猫語のわかるナカ

保坂和志「明け方の猫」。《明け方見た夢の中で彼は猫になっていた。》で始まる不思議な小説である。カフカの『変身』みたいた。彼は猫となって、近所を散歩する。だが《覚めたら…忘れ》てしまふと心配している彼の夢を、いったい誰がどうやって記録したのだろう。

『さようなら、ラプ子』は、よしもとばなさんが公式ホームページに書きついた日記。《高齢の両親が入院したり犬が病気になるたり》(…)いっしょにしているのか?するたびに、少しずつ…覚悟を決めていかななくてはならないのが人生というものの《だこのべるよしもとさんが愛犬ラプ子を見てきた数カ月の記録だ》。

《病人の前では笑顔でいたい、いないところではちょっと泣くけど、それに酔わない。それが私のほんとうの悲しみの表現。そして命に対する敬意。》

カジユアル読書



桜内文城「著」公會計革命(講談社現代新書・777円)
 櫻川昌哉「著」金融立国試論(光文社新書・735円)
 草野厚「著」歴代首相の経済政策 全データ (角川oneテーマ21・8200円)

のツケは将来世代が、重い税金を払って

尻ぬぐいすることになるのだ。

これを何とかしなければと、桜内氏は

「国ナヒ」を開発した。政府は大福帳で

なく、ちゃんと複式簿記をつけなさいと

使ってもらいたい。

財政も変だが、金融もおかしい。

櫻川昌哉「金融立国試論」は、「こー

〇年あまののたちち回っている日本経済

を、切れ味鋭く診断している。

もはや大福帳の時代ではない

いう提案だ。パソコンソフトにしているので小泉首相も、主権者である国民も、手軽に国家予算が作れる。財源のやりくりや、将来世代の負担額までひと目でわかるすべれもの。今度の予算編成でぜひ

櫻川氏は、バブル崩壊の後で、不良債権がなお増えた点に注目する。問題は、オーバーバンキング(預金が多すぎて困った銀行が、不動産や建設に貸し付けを増やした)だった。銀行の数の多すぎでは

ないから、合併でメガバンクをこさせてもダメ。むしろ逆効果だという。

銀行が株式を保有している、株安で自己資本率が下がり、貸し渋りになる。銀行が融資そっちのけで、国債を買い過ぎていく。自己資本の定義がいまいちなので、規制がゆるゆるである。そんな日本の銀行は、先端産業に十分な資金を提供するどころか、衰退産業を整理するどころか、本来の役目を果たしてこなかった。でも、本書の提案を取り入れれば、金融再生ができるはずだという。

草野厚「歴代首相の経済政策 全データ」は、ありそひでなかった、便利な本。首相の演説のさわりが紹介してあって、当時の雰囲気を感じ出すことができる。思えば遠くまで来たものだ。昔の苦労を思えば、そして勇気さえあれば、未来は開けると信じていいたいものである。

橋爪 大三郎さん(社会学者)の

2005年(平成17年)1月30日

日曜日

ポケットから

さて、税金の話である。せつかくの稼ぎを、否応なく持つて行かれるのが税金。泥棒!と言いたいが、税金を払わなければ犯罪になる。その税金で仕事をするのが、政府である。政府がむやみに税金を集めないように、人民の代表が議会で予算を決め、使い途も監視する。民主主義の基本だ。

この基本が、日本ではまるで守られてこなかった。桜内文城「公會計革命」を読むと、戦後民主主義とは何だったのだろうとがっかりする。さらには、国債を乱発して公共事業のやり放題。放漫財政

カジユアル読書



橋爪 大三郎さん(社会学者)の

日曜日

2005年(平成17年)6月5日

ポケットから



最近の大学生は、新聞を取らない。ニュースはインターネットでみている。授業のレポートや就職活動も、まずネットで情報集め。そして携帯を片手に、いつも誰かとメールしている。

そんな若者たちの中に「確固たる自信のなき」…が蔓延しつつある」と、精神科医の齋藤環さんは言う。《「いいは自分の居場所ではない」という違和感を捨て切れない》のだ。

どうしてか。齋藤さんの分析によると《「負けたと思ひこむ」こともまた、ナルシズムの産物だ。理想の自分にな

れないことばかり決まっていって、取り返しがつかない。それなら、現状に不満でも、むだな努力はしない。理想の自分を信じ続けていたほうが楽なのだ。

なぜこれも傷つきやすいのだろう。これは、晩婚化も少子化も当然だ。

きょうだいの数が減り、近所づきあひも疎遠になって、対人的能力(ひたすらるなタイプの人間と辛抱づよくつきあう能力)が低下した。同級生受けするコミニケーション・スキル(ひょうきんたや…三十代女性の三人にひとりのは独身

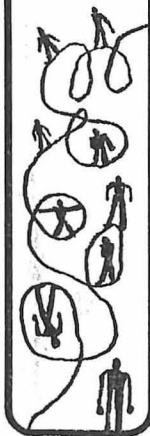
という結婚の姿容を、複数の個人が一緒に暮らすという家族の原点からどうえ直して、新たな発見がある。

橋本治さんの小説『勉強ができてくなくて恥ずかしくない』も、主人公のケンタ君が、学校や近所のみならず、懸命に生きていく成長物語だ。ケムや携帯のなかった牧歌的な情景を借りて、若者たちに応援歌を送っている。

でもいままじり、ネットも携帯もなくせない。ならば、子育てを工夫するしかない。たとえばお金。齋藤さんは《ひきこもりの子を抱える家族には…こづかいはい…必ず「給料制」つまり定期的に一定額で渡すよう指導している。ちなみに、榎原節子「わが子が成功するお金教育」(講談社+文庫)はこの家庭にもあてはまるコツと実例が充実している。

齋藤環「著」『負けた教の信者たち』(中公新書ブクレ・7900円)
長山靖生「著」『いっしょに暮らす。』(ちくま新書・756円)
橋本治「著」『勉強ができてくなくて恥ずかしくない』(ちくまプリマー新書・714円)

なあ君 一緒に生きていこうよ



カジユアル読書

橋爪 大三郎さん(社会学者)の

日曜日

橋爪 大三郎さん(社会学者)の

日曜日

2005年(平成17年)4月24日

ポケットから



反日デモが、拡大している。歴史に「だわる中国人と、歴史に背を向ける日本人。なぜだと反省を迫られている。

でも、日本人はちゃんと反省をしたのだと思う。民主主義や言論の自由が十分だったため、無謀な戦争を止められなかった。だから戦後はどんな論調も尊重し、自由と民主主義を大切にしてきた。この点は中国より、じつは進んでいる。胸を張っていいのである。

とは言え、過去を忘れてはいけません。本人が中国との違いをいさぎ意識した

新が可能になった。中国が近代化にもたしく間に、いち早く富国強兵をこげた日本が攻め込むことにもなったのだ。

西郷信綱『古事記注釈』(全八巻)は、宣長の「古事記伝」に敬意を払いつつ、

たころ、ドイツでは、カントが『純粹理性批判』を執筆していた。言葉を正確に用いることで、思考を研ぎすまして、骨組みが大きくて精密な思想を組み立てていく。近代哲学の誕生である。

過去を忘れて今が見えるものか

西郷 信綱「著」『古事記注釈 第一巻』(ちくま学芸文庫・13005円)
イマヌエル・カント「著」『純粹理性批判 上』(原佑訳、平凡社ライブラリー・18000円)
ライプニッツ「著」『モナドロジー 形而上学叙説』(清水富雄ほか訳、中公クラシックス・1418円)

ナシヨナリズムの源流、本居宣長にたどり着く。日本語から中国の影響(漢意)から(こ)を取り除き、もま(こ)を抽出しよう。大胆なプランである。

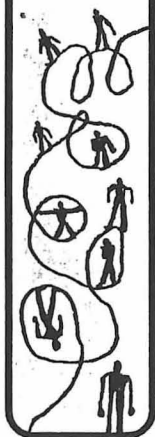
思えば、宣長の仕事があつて、明治維新が古代日本語の研究に没頭してい

人間ひとりが手にできる最大の武器、理性に、カントは人類の希望を託した。理性の批判(正しい使い方)のうえに、科学技術や資本主義が開いた。まるでカントが、宣長と相談して仕事を進めたかのような。今回の平凡社版は、初版と二版の異同が上下二段組みになっていて、とても助かる。

ライプニッツ『モナドロジー』。《モナド》とは、単一な実体…である。単一とは、部分がないという意味である。《で始まる本書は、幅も厚みもないモナドが、この宇宙をうまっているところ。このゆるやかなライプニッツは、微積分を發明し、カントの先駆ともなった。

哲学も思想の古典は、人びとの発想を支配し、時代を動かしてきた。このことに無知で、歴史にもうとげれば、誰と議論しようと勝負になるはずがない。

カジユアル読書



橋爪 大三郎さん(社会学者)の

ポケットから

2005年(平成17年)9月5日



「人類の歴史の…ごく最近まで人びとがどのように暮らしてきたかを理解するには、『未開』と呼ばれる社会が唯一のモデルになる」。構造主義を唱えた人類学者レヴィ・ストロースが、一九八六年に日本で行なった講演だ。

要するに、こういふことだろう。

私たちの社会は、変化し続けている。去年より今年、そして来年と、成長して当然なのが産業文明だ。でもかつて、変化しないのを誇りとする社会があった。時計じかけのように、毎年同じ軌道を刻む。産業文明は蒸気機関のようにエネルギーを消費する「熱い社会」だが、「未開」の「冷たい社会」こそ、人間社会の基本的なあり方だった。

だからレヴィ・ストロースは、日本が大好きなのである。伝統(変化しない美)を認めたかった仏教の、孤独な闘いを

「しき」と現代とが共存する、稀有な社会だと、日本を高く評価している。

実際の日本は、産業文明にあこがれ、西歐を追いかけてきた。でも、構造主義から見れば、産業文明はいびつでクレ

カジユアル読書



いびつな日本の姿を照らし出す

紹介する。河口豊海、鈴木大拙、高橋順次郎…インドやチベットに原典を求め、大蔵経や辞典の編集に没頭。でも仏教の教えを、わかりやすい日本語に置き換えることはなかなかできなかった。

田村晃祐の『近代日本の仏教者たち』は、文明開化をすすめる明治政府に「公認」されなかった仏教の、孤独な闘いを

- ①レヴィ・ストロース「著」レヴィ・ストロース講義 (川田順造・渡辺公三訳、平凡社ライブラリー・1260円)
- ②田村 晃祐「著」近代日本の仏教者たち (NHKライブラリー・1176円)
- ③キケロー「著」キケロー弁論集 (小川正廣・谷栄一郎・山沢孝至訳、岩波文庫・945円)

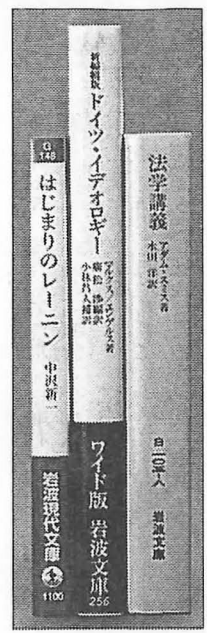
「借金に苦しんでいるにもかかわらず、かれらは政権の獲得を求め、…国政に動乱が起れば手に入れることができる」と考えている。『小泉政権を批判する民主党の言い分だろうか? いや、得意の演説で政敵をやりこめ、政治家として活躍、刺客に殺されてしまった雄弁家キケローの、二千年も昔の演説だ。』

悪口雑言、スキャンダル、何でもありの当時の弁論術は、いまのテレビみたいだった。そんなキケローが演説のお手本だから、党首討論会で論争が噛み合わないことも仕方ないかもしれない。

仏教もそのほかの伝統も置き去りにして、経済大国への道を突き進んできた日本。この先どんな方向を目指せばいいのだろうか。もしも優れた政治家が、それをはっきり言葉でのべてくれるなら、なるほど人びとは支持するに違いない。

橋爪 大三郎さん(社会学者)の

ポケットから



「道徳哲学」を教えていた。何でもありの一般教養みたいな授業だ。ある年、法学を講義したときの、学生のノートが残っていたのが『法学講義』である。

なかみを見ると、裁判や契約など法学らしいテーマのほかに、「生活行政」の章にかなりの分量をあてている。市場の

「法則を踏まえて、政府はどんな政策をとるべきか。経済と政治がからむややしい領域に、よく目配りしている。」

アダム・スミスは、分業を、進歩と発展の原動力と考えた。しかし、マルクス

- アダム・スミス「著」法学講義(水田洋訳、岩波文庫・1155円)
- マルクス/エンゲルス「著」新編新版 ドイツ・イデオロギー (廣松渉編訳、小林昌人補訳、ワイド版岩波文庫・1260円)
- 中沢新一「著」はじまりのレーニン (岩波現代文庫・1155円)

ヒントを下さい アダム・スミスさん

とエンゲルスに言わせると、分業こそ貧富の格差をもたらす諸悪の根源だ。そう意見が一致して、意気投合した若い二人が、協力して書きあげたのが『ドイツ・イデオロギー』である。

乱雑なノートを適当に整理して出版した、マルクス・エンゲルス全集は信用ならないので、廣松さんが、心血を注い

で校訂し、元の姿を復元した。今回の岩波文庫版は、それにもとづいている。

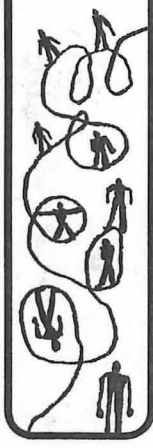
中沢新一「はじまりのレーニン」。よく笑う人だったレーニンは、暇があると哲学を研究し、唯物論の基礎を、ヘーゲルの弁証法にまでさかのぼった。そのま

た先に、ヤコフ・ベーメの三位一体論がある。中沢氏は指摘する。マルクス主義の源泉をたどる旅である。

経済学もマルクス主義も、この社会のまずい点を診断し、処方を与えようという、手さぐりの努力から始まった。解決のヒントは、法学や神学など、意外なところに隠れている。ただの経済学者なら、なかなかみつからない。

郵政民営化で、国会がもめている。どうも、納得のいく説明を聞いたことがない気がする。アダム・スミスが生きていたら、ぜひ意見を聞きたいものだ。

カジユアル読書



ポケットから



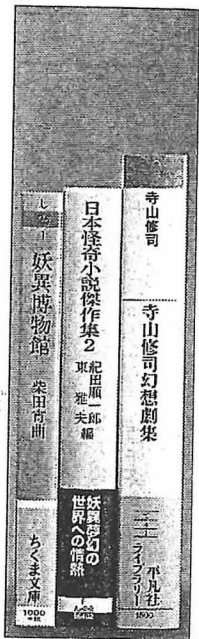
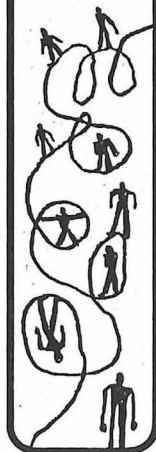
東アジアが、いよいよいよいよ。
東アジアと言っても、要するに中国と韓国である。日本と関係がこじれてしまっただけのこと。
背景は複雑だ。小泉首相が意地を張って、靖国参拝を続けてくるから。ではない。日本人の反省が足りないから。でもない。もっと大きな底流が、この三国を穿つからである。
中国の近代史は、悔しい、ふがいないの連続だった。アヘン戦争、日清戦争に負け、植民地にされ、あげくは日本に侵略された。韓国は、日本の一部にされて

- ①王敏「著」中国人の愛国心 日本人とは違うらうの思考回路 (PHP新書・7300円)
- ②古田博司「著」東アジア「反日」トライアングル (文春新書・7460円)
- ③小口幸伸「著」人民元は世界を変える (集英社新書・6000円)

なぜこんなにこじれるんだろう

中国はじきに、日本とアメリカを追い抜き、世界一の大国になる。東アジアのリーダーになる。すると日本は、アメリカと組んでバランスを取ろうとする。小泉首相のアメリカ一辺倒も国連安保理入りし、運動も靖国参拝も憲法改正も、その準備ではないか。そう考えて中国は、警戒を強めているのかもしれない。
王敏「中国人の愛国心」は、「西洋文明に憧れて以降の中国」が、受容と抵抗をくりかえしてきたと語る。「日本の文化を好んで取り入れる中国の若者が日本に反発するのは、だから「自然な成り行き」だ。下手に騒がなくていい。
日中国交回復の際、周恩来首相は、戦争は日本の一部軍国主義者の責任で、日本国民は被害者だったと、中国国民を説得した。釈然としないまま、みな納得した。だからA級戦犯を合祀する靖国神社への首相参拝は、国交回復の…唯一の根拠を覆してしまっ。さびびるなら、さびびるなら、王敏氏はみる。
でもそのうち中国は、歴史問題を言わねばなるような気がする。日本をアメリカの側に追いやるだけだからだ。
古田博司「東アジア「反日」トライアングル」は、中国と韓国は中華思想のせいで、日本を許せないのだとする。
小口幸伸「人民元は世界を変える」は将来、東アジア経済圏で、元ではなくに円を基軸通貨とするには、金融重視の円高政策にますます転換すべきだと説く。こういう長期的視点から、外交や経済戦略を進めてもらいたいものだ。

カジユアル読書



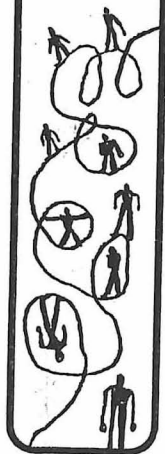
- ①寺山修司「著」寺山修司幻想劇集 (平凡社ライブラリー・1575円)
- ②紀田順一郎・東雅夫「編」日本怪奇小説傑作集2 (創元推理文庫・1150円)
- ③柴田宵曲「著」妖異博物館 (ちくま文庫・1050円)

人はなぜ幻想世界に魅せられるか

グ。なぜか街中の壁という壁が消えてしまふ。五反田のさえないアパートに住むコック見習いの主人公は、隣室の奇妙な兄妹や通行人たちの不条理な空間に入り込む。アパートの床下では、主人公の母親がなんと田んぼを耕している。都会と農村のあいだに、どうしようもないギャップがあった。そこにはほっかり、暗闇が口をあけていた。六〇年代に現れた暗黒舞踏も、紅テントもアンケラ年三十五年の傑作一六編を収める。横溝正史、久生十蘭、中島敦、三島由紀夫ら、そうそうたる顔ぶれが並ぶ。都市には、隙間がある。山の手の洋館には秘密が隠れており、暗い街角には職

業も得られない男たちが出沒する。そんなわくわくドキドキの空想を、雑誌「新青年」の探偵小説や怪奇小説がかきたてた。学校に通い、個性に自覚した若者たちのモタリズム幻想である。
柴田宵曲「妖異博物館」はさらに時代をさかのぼり、明治以前の化物を紹介する。河童に大入道、一目小僧と、農山村の怪異譚を集めてある。人びとの個人意識が強まる江戸の「文政以後は…幽霊中心の怪談」が増えるのだそうだ。
怪異な幻想の世界に、なぜひとは魅せられるのか。それは、言葉でつくられた人工の迷宮だ。幻想を組み立てる恐怖や怪異は、昔ながらの共同体や家族から切り離された心ほそい自由の象徴である。そういう若者が恐怖を共有する「文政」で、都会で個人として生きていくのだという連帯の感覚を求めているのだらう。

カジユアル読書



ポケットから

見世物小屋。サーカス。医学部裏手の空き地。東京都杉並区の住宅街で突然はじまる街頭劇……。
演劇実験室・天井桟敷を主宰した寺山修司は、「青森県のせむし男」「大山デブコの犯罪」で世間をあっと言わせた。一九六〇年代の高度成長期、ブルドーザーが山肌を削り、新幹線や高速道路が延びていく。そんな時代から不器用に取り残され、忘れられようとする人びとの風景が、哀しいイメージとなって、これでもかこれでもかと舞台にあふれ出す。たとえば『幻想劇集』冒頭の「レミン